【論　文】

南知多町羽豆神社蔵紺紙金字法華経について

須藤弘敏

はじめに

日本の金字写経には長い伝統と多数の作例があり、東アジア各地で盛んだったこの装飾写経の中で、形式様式どちらにおいても日本独自の特徴がある。しかし、その中で中国宋代の経絵に酷似した異例の金字法華経が二巻あり、その制作地などが定まっていなかったため、筆者はそれらを現地で詳しく調査し、これが十一世紀末に北宋の神宗皇帝から当時の白河天皇に贈られた金字法華経を十三世紀末に転写したものと推定した(1)。この二巻、Cleveland美術館とNew York Public Library Spencer Collectionに所蔵される金字法華経（以後、Cleveland本、Spencer本と略称する）(図2・3)はみごとな写経とともに、東アジアで最も長い見返し画面にきわめて精緻な金泥描きで法華経二十八品の内容を絵解きしている。荒巻史枝氏はこの転写本系統の金字法華経がさらにもう一部愛知県南知多町羽豆神社に伝来していることを最近報告され、田中塊堂氏と筆者の研究を参照しながら、この羽豆神社本(図1)が室町時代応永十五（一四〇八）年の制作であり、合衆国所在の二巻も同時期に同一工房で製作されたものであろうと提唱された(2)。

筆者が研究してきた希少なタイプの金字経がさらに一点加わったことは大きな喜びだが、一方で制作推定年代が百年も下ることに驚かざるを得なかった。中世日本の金字経の中で書体画風ともにすぐれたこの一群の写経が応永年間の制作なのかどうか、またそうだとすればなぜ擬古的な様式を必要としたのか再考を迫られた筆者は、ご所蔵者の高配を得て本法華経ほか九巻と経箱や文書などを詳しく調査させていただいた(3)。その結果、これら羽豆神社と合衆国所在の金字法華経三部は写経絵画装潢ともに同一工房によるもので、羽豆神社本奥書が写経本文と同一筆者であるこ

図 1　羽豆神社本法華経巻一

図 2　Cleveland本法華経巻一

図 3　Spencer本法華経巻一

図 4　羽豆神社本施入注文

とから、すべて応永年間の制作であることを追認した。しかし、その先にこそ重要な問題があることを確かめたため、以下その考察を行いたい。

まず、羽豆神社本の書誌情報などの概要を確認し、次にその奉納者一色道範が他社へも三部同時期に金字法華経を施入していた事例を検証する。次いで、羽豆神社本とCleveland本、Spencer本の書体、画風の比較検討を行い、あらためて実際の制作時期と様式的年代が一致しない問題を考察する。それらを踏まえた上で、実はもう一つ同一工房によって制作された金字法華経が現存し、それに関わる情報からこれら金字法華経群全体の意義を明らかにする。

一　羽豆神社本金字法華経心阿弥陀経の概要

愛知県南知多町師崎、知多半島の文字通り先端に位置し、この地域で長く信仰を集めてきた羽豆神社には、昭和五一年に愛知県の文化財指定を受けた紺紙金字の法華経八巻と心阿弥陀経(4)一巻が施入当初の経箱および施入文書（図4）とともに伝来している。文書には以下のように奉納内容が詳しく述べられている。

奉施入幡頭崎大明神御経入注文
紺紙金泥法花経一部八巻并心阿弥陀経一巻／已上九巻
御料紙紺紙／御字金泥／御軸水精／御紐紫組／御箱蒔絵
御紋輪寶／御くりかた　なんりやう／輪寶
御打敷　赤地錦／以上
應永十五年戊子卯月廿五日　一色従五位上修理大夫源朝臣
／沙弥道範　花押

この「注文」は施主一色道範自身の筆とみられ、あげられた内容のうち打敷以外は完存している。紐は巻一以外は切れてはいるものの発装部分に当初の紫組紐残欠が確かめられる。経箱とその意匠が細かに述べられているが、これは後段で詳しく検討する。また施入の願意については各巻の金泥奥書（図5）に次のように書かれている。

奉施入　尾張國幡頭崎大明神御寶前
紺紙金泥妙法蓮華經一部八巻并心阿弥陀經各一巻
右意趣者奉為　天長地久國土豊饒殊武運長久子孫繁榮息災安穏　壽命長遠随順　上意飽足捧禄心中所願二世悉地一、圓満仍所奉　施入如件
一色従五位上修理大夫源朝臣
應永十五年戊子卯月　日沙弥道範　花押

図5　羽豆神社本巻一奥書

本経の主な書誌情報と羽豆神社の由緒、施主一色道範などについては既に荒巻氏が報告されているが、一部重複をいとわず留意すべき点をを述べたい。

紺紙にやや太めの銀界線をひき発色の良い金字で法華経八巻と「般若心経」と「阿弥陀経」を合わせて写経した一巻の都合九巻からなる。「般若心経」と「阿弥陀経」を一巻に写経する例は大英博物館本など十二世紀の紺紙金字経にもあり、特異な例ではない。また開結経が当初からなかったことは前掲の「注文」でも確かめられる。各巻の法量については荒巻氏の計測値と異なる箇所も少なくないので、あらためて表1にまとめた。紙高が二八センチ近くもあるのは十二世紀から十五世紀にかけての日本の写経と異なる特徴だが、注目されるのは平均四六．六センチという紙長で、中世の紺紙経一般は五〇センチ以上で、後に同一工房作として論じるCleveland本、Spencer本もそうである（表2）[5]。また界幅の数値はSpencer本とほぼ同じだが、界幅に対して文字がやや小さめなため余白がめだつことに注意しなければならない。料紙の不揃いや極端に短い紙があったり、そのせいもあってか界線のだぶりがあるなど写経や装潢に何か事情があったことも考えられる。また写経本紙の天地の幅について日本のほとんどの写経が地界を大きく取るのに対し、この三種はすべて天界の方が大きいことは注目される（図6）。ただし見返し絵の天地余白は通常の日本の形式に近い狭い幅で、下部がやや大きい。

法華経巻一にのみ見返絵があるが、他の八巻には当初から絵はなく表紙と同じ金地装飾のみである。これは装飾経としてはきわめて特異な装潢で、巻一見返絵が八巻すべての説相図を盛り込んでいるというだけでは説明がつかない。日本はもとより中国朝鮮の金字経にもこうした例がほとんどないことから、羽豆神社本の特殊な性格がうかがわれ、後述するCleveland本、Spencer本どちらも巻一だけ伝来している意味も浮かび上がってくるのだが、追って詳述する。

もうひとつ羽豆神社本の現状で奇異な印象を持つのが奥書の扱いである。巻一を除く全巻が巻末奥題のあと一行空けて「應永十

図6　諸本巻頭比較

表1　羽豆神社本金字経　法量一覧

	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八	心阿弥陀経
紙高	27.7	27.6	27.8	27.7	27.6	27.7	27.7	27.7	27.6
界高	21.3	21.2	21.3	21.3	21.3	21.4	21.4	21.3	21.4
天	3.0	2.9	3.0	2.9	2.8	3.0	2.8	2.9	2.7
地	3.4	3.4	3.4	3.5	3.5	3.3	3.5	3.5	3.5
界幅(5行)	9.7	9.65	9.7	9.7	9.7	9.7	9.7	9.7	9.8
見返し	71.8	21.6	21.7	21.6	21.5	22.1	21.7	21.6	21.4
1紙	22.6	46.4	46.4	46.4	46.4	46.5	46.1	44.4	44.6
2紙	5.5	46.6	46.6	46.5	46.7	46.6	46.8	46.3	37.2
3紙	46.5	46.7	46.6	46.7	46.8	46.7	46.5	46.6	40.6
4紙	21.6	46.7	46.7	46.4	46.7	46.6	46.6	46.6	36.6
5紙	23.3	46.6	46.6	46.4	46.5	46.5	46.5	46.5	44.3
6紙	46.8	46.5	46.6	42.9	40.1	46.7	37.0	46.6	42.8
7紙	46.8	46.6	46.6	42.7	46.6	46.5	44.3	46.5	28.8
8紙	46.6	46.5	46.7	42.6	46.5	46.6	46.4	46.3	0.2
9紙	46.7	46.6	46.6	46.3	46.6	46.7	46.5	46.2	22.5
10紙	46.6	46.6	46.7	46.2	46.5	46.6	46.6	43.0	
11紙	46.8	46.7	46.7	46.3	46.6	46.6	46.6	42.6	
12紙	46.4	46.5	46.7	46.6	46.6	46.6	46.5	40.7	
13紙	46.5	46.5	46.6	46.6	46.5	46.5	42.6	46.4	
14紙	46.5	46.7	46.6	46.5	46.6	46.5	46.2	37.0	
15紙	46.6	46.5	46.6	44.5	46.7	46.6	46.2	46.5	
16紙	46.4	46.5	44.5	46.4	46.6	46.6	34.7	46.4	
17紙	46.5	46.5	46.6	46.7	46.6	46.6	44.3	46.5	
18紙	44.5	46.6	46.4	46.5	46.6	46.4	36.7	46.3	
19紙	46.3	46.7	46.5	46.5	46.5	46.6	38.4	9.7	
20紙	19.1	14.7	46.3	46.5	42.5	46.5	19.3	13.0	
21紙	13.5	31.0	44.8	36.6	46.6	46.6	21.4		
22紙		46.1	46.3	7.4	30.8	29.0	27.1		
23紙		46.3	44.4	15.7	11.3	8.0	15.0		
24紙		46.4	24.9		29.1		15.2		
25紙		46.4	1.9		5.8				
26紙		44.2	28.5						
27紙		8.2							
	873.9	1189.9	1142.1	997.5	1066.3	1037.2	955.2	855.7	319.0

単位 cm

表2　諸経 法量比較表

	Cleveland 本 紺紙金字法華経 巻一	Spencer 本 紺紙金字法華経 巻一	羽豆神社本 紺紙金字法華経 巻一	百済寺別本 紺紙金字法華経 巻一	蘇州瑞光塔出土 紺紙金字法華経 巻一	百済寺 紺紙金字法華経 巻五
制作地	日本	日本	日本	日本	中国	日本
制作年代	1408年か	1400年代初頭	1408年	1409年	9～10世紀	12世紀
本紙紙高	27.7	27.6	27.7	27.3	27	26.1
見返し画面高さ	24.4	23.4	24.6	見返しなし	25	25.0
見返し画面長さ	78.5	77.1	71.8		35.2	20.0
	(51.0+29.5)	(52.7+26.6)	(45.2+26.6)			
見返し縦横比	3.21	2.8	2.91		1.4	0.8
見返し天 余白	1.7	2.1	1.8		1.0	0.4
見返し地 余白	1.6	2.0	1.7		1.0	0.7
界高	21.7	20.5	21.3	21.3	21.0	20.2
界幅（5行）	10.3	9.5	9.7	9.35	8.8	9.6
界幅	2.1	1.9	1.9	1.85	1.8	1.9
天界	2.6	3.3	3.0	2.6	2.8	2.5
地界	3.3	3.7	3.4	3.4	3.2	3.4
紙長最大	51.6	52.8	46.7			55.0

単位 cm　すべて須藤計測　空欄は未計測

五年戊子卯月」と経文と同じ金泥で書いているように見えるが、実はその直前の行で紙は段状に裁ち切られており、「卯月」の下半分までが前の料紙で、年紀の部分に当たる一行の上半分は次の料紙なのである。そのため全巻で、巻末とその直前に当たる料紙の紙長が短く不揃いとなっている。款記や鑑蔵印の抹消や上書きは所蔵者を転々とした写経にしばしば見られるが、段状に切断改装した例はあまりない。しかし、幸いにもその段状に裁ち落とされた元の奥書がすべてマクリ状態で残っている(図7)。現在巻一のみは年紀部分を含んだ形で奥題の行以降を切り離して巻頭見返しの次に移されている。これが十二行分あるのだが、さらに二行半という異例の短い料紙をはさんで、冒頭二行を空白とした当初の第一紙が継がれている。巻一とそれ以外の八巻で切断の造作が異なることと切断部分がすべて保存されていることを考えるならば、奥書の情報が不都合になったような事態は想像しづらく、経巻が施入時から羽豆神社宮司家に伝わってきたこともあって、この奇妙な切断の意図はわからない。ただし、ある時期から全巻のうち巻一のみを披見させる対象とし、その際に特殊でみごとな見返絵とあわせて施入の人物や年紀を強調する意図から冒頭に移されたかとも推測できる。なお、この金泥奥書は墨書の施入注文とは筆者が異なり、後者は施主一色道範と考えてよく、金泥奥書は経文と同じ写経工房の経師によるものであろう(6)。

ほかにも通例通りの心阿弥陀経を除く全巻で、第一紙冒頭に界線のない二行分の空白が設けられていることが注目される。既にCleveland本らについて考察した際に指摘したように(7)、これら三部の金字法華経の大陸祖本がそうだった可能性が高いが、それを元にこの工房が独自の形式としてくり返していた可能性もあり得る。それは後段であげる同工房制作の別の金字法華経が同じ二行の空白を設けているからである。

表紙は幅二一・三センチで単に金泥を塗ったシンプルなもので、縦一一・七センチ幅二・六センチの外題が貼られている。水晶八角形の軸端は当初のものだが、一部は脱落して別途保存されている(図8)。ちなみに、軸端はSpencer本が同じ水晶八角形で現在は下の軸端が欠失、Cleveland本は円筒形鍍金で、後述する百済寺別本金字法華経は水晶六角形で上下とも現存する(8)。

図7　羽豆本奥書断簡

図8　羽豆本外題

二　羽豆神社本と関連諸本

見返絵をともなった法華経巻一は上記の三種のみ確認されているわけだが、荒巻氏は田中塊堂氏の論考(9)を引用し、応永年間に一色道範が各地の社寺に奉納した特異な金字法華経群があったことを確かめている。それらは現在の所在を確認できないものもあるが羽豆神社本らを考察する上できわめて重要な情報である。田中氏が報告された法華経は羽豆神社本のほかに次の三部である。

A　京都市某家蔵　伝来先不明　紺紙金字法華経八巻　紙高九寸二分、奥書「右意趣者爲天下泰平國土安穏殊武運長久／子孫繁昌息災延命心中所願皆令満足／所奉施入如件／一色修理大夫入道／應永九年壬午七月七日　沙弥道範（花押）／叡山本院南谷住侶幸朝書之」

これは豪華な鍍金透かし彫りの盒形経箱に収められ、羽豆神社本と同じような見返絵をやはり巻一(10)にのみ付していたという。表紙は薄紫紙に金銀大小箔を三段村濃霞に散らしていたといい、Spencer本の表紙に酷似している。八巻すべての奥書が同じだったとされ、巻一の巻末部分が図版として掲載されているが、奥書の直前の行で料紙が変わっているようで、そこに奉納先の寺社名がないのも不自然である。田中氏も荒巻氏も触れていないが、おそらく「奉施入　○○」とあった行が切除されていたものと思われる。

B　款記（奥書）のみの断簡　住吉大社奉納経　「奉施入　住吉大明神御寶前／紺紙金泥妙法蓮華經　一部八巻並／般若心經　阿彌陀經各一巻／右意趣者　天長地久國土安穏殊信心施主／武運長久子孫繁昌息災延命現當二世所願成就／皆令満足所奉施入如件／一色修理大夫入道／應永十一年庚申九月　　日　沙弥道範（花押）」

田中氏は所蔵者をあげていないが、氏が先に「住吉奉納紺紙金泥經」として同じものを掲げた『古写經総鑑』(11)巻末の現存古写經年表には「池田庄太郎」とあり、大阪の古美術商池田大仙堂所蔵だったことがわかる。一九四一年刊行の『池田大仙堂古美術集芳』には当該断簡が図版として掲載されている（図9）(12)。この奥書は界の上部をあける羽豆神社本と形式はやや異なるが書体は羽豆神社本奥書と同一である。荒巻氏によるとこの断簡は現在早稲田大学図書館荻野研究室収集文書に収められているという。

C　所蔵記録のみ　熱田神宮奉納経　「一、法華經一部　應永十五年戊子卯月／一色従五位上修理大夫源朝臣沙彌道範」の記録が寛政三（一七九一）年熱田神宮大宮司千秋家神寶目録写本にあり、

図9　池田大仙堂本款記

ほかに二部の「妙經」とともに記載されていたという。また同四年の柴野栗山の「寺社寶物目録」の熱田神宮の条に「法花經一部一色修理大夫奉納」と書かれていたことにも触れられている。田中氏によれば、寛政年間の時点で一部は社外に出ていたとされ、荒巻氏は不動院文書中にあるとされ、その奥書も報告されている[13]。

室町時代に足利義満に重用された守護大名一色満範、出家後の道範が応永九年から十五年にかけてA某家、B住吉大社、C熱田神宮、そして羽豆神社に連続して奉納した四部もの金字法華経があったわけで、歴史的な価値も高い。宝物記録が作成されるような主要神社にたまたま奉納したとか、偶然これらだけが残ったという可能性はまずない。信心だけではなく政治的な意図もあっての納経と考える所以は、住吉、熱田という二大社への奉納、羽豆神社本の古様で精緻な写経とそのみごとな経箱やA某家所蔵本の鍍金透彫り経箱という豪華な調度にある。粗い画質の図版だけでも書体や体裁はすべてが同じ工房による制作と認められる。田中、荒巻両氏の報告によれば、これらのうちA某家本と羽豆神社本にのみ見返絵のある巻一が残っていたわけだが、逆にB住吉大社奉納本、C熱田神宮奉納本の巻一が行方不明であることが重要なポイントになろう。また、図版で見る限りだが、A本とB本は本紙天地の幅が均等もしくは天界がやや大きく、羽豆神社本らの特徴と一致する。

三　羽豆神社・Cleveland美術館・Spencer Collection各本の書体

実際の写経の様態を比較検証できる三本について、まず荒巻氏が触れていない書体の問題を検証する。先稿でCleveland本、Spencer本を考察した際述べたように、これらの最大の特徴は中世日本の写経書体と結びつけにくい傾向である。Cleveland本の「経文はアクセントを強くきかせた一見力強い書体で、宋代の写経版経に最も近似した印象を受ける。しかし、巻末に近づくにつれ徐々に緊張感が失われて字配りがゆるみ、巻頭で見られた一種粘っこい書体が崩れてあっさりしたものになる[14]。」Spencer本も同様で、さらに巻頭から巻末までずっと緊張が維持できないことも共通している。図10に掲げたのは両本（巻一）の巻末近くの部分である。ここでは比較的大陸風の書体を取り戻している。これに羽豆神社本の同一箇所を対照すると、少なくともこの箇所については三つすべてが同じ筆者によるものである。同じ祖本から写したから似ているのではなく、字形以外でも書のはらいやとめ、筆線の強弱の癖まですべて一致している。熟練した経師によって書かれたものだけに、逆に個性もはっきりしている。

この書体について田中氏は、先のA某家本を紹介した際に「金泥文字は室町の時代風に染まらぬ和風の古體を傳へて、一見鎌倉中期を下らざるものと思はれる書であるが、具に見てゆくことによって時代の書體の散見するに氣がつくのである[15]」と述べられている。A某家本の書体については不鮮明な図版でしか検討できないが、三本を実見した田中氏が「同一筆者である」と述べているので、羽豆神社本等も同系と考えてよい。そこで、田中氏の言

図10　巻一巻末比較

う「和風の古體」とは具体的にいつ頃の何をさしているのかわからないが、少なくとも室町時代には措定できない作為的で擬古的なものと認識しておられたことは筆者の主張と一致する。また、それが一部緊張感を欠く部分で「時代の書體の散見する」という批評も筆者の緊張と弛緩という見解と同趣旨である。田中氏が言う「和風の古體」を筆者はむしろ宋版経等に通じる様式と見ており、これより柔らかい書体だが十二世紀から十三世紀にかけての写経にときどき似たような傾向のものを見かける(16)。

しかし、書体で写経の制作年代を特定するのは実はむつかしく、ことに十二世紀以降の、写経版経を問わず宋や高麗の請来本がかなりあった時代はその影響を無視できず、鎌倉時代の春日版版経を見るまでもない。擬古的なあるいは疑似異国的な書体が写経に特異性や権威を帯びさせるのにきわめて有効なことは、菅公筆を名乗る古経切をはじめ平安時代から江戸時代まで多数の実例がある。本論が対象としている、一色道範奉納の各種金字経がほぼ一貫して同じ書体であり、かつそれが十五世紀初めの応永年間と思えない様式であることは、写経者がその効果を必要としていたことを何よりよく語っている。作為的な書体だからこそ、しばしば破綻が見られて地があらわれているわけである。ただ、その地を田中氏は「時代の書體」と呼んでおられるが、筆者には室町時代風とまで特定できるようには見えず、十三世紀の写経にも近い印象があるため中世日本風と認識している。

いずれにせよ、この一群の金字法華経写経には実際の書写年代から時代を意図的にずらしてみせようとした意図が明確である。それは架空の書体を作り上げようとしたのではなく、祖本の書体

図11　羽豆神社本各巻書体

図12　羽豆神社本各巻書体

を写そうとした結果であろう。絵画の問題で後述するが、希少な祖本だからこそくり返し転写する意義があった。その希少な祖本とはCleveland本らの出自を検討して、延久五（一〇七三）年に請来された北宋神宗皇帝賜与本金字法華経だと筆者は既に推定している(17)。重ねて述べるが、この一群の金字法華経は日本のどの時代の写経とも異なるイメージを創出することにつとめているのである。

羽豆神社本九巻の筆者は実は複数ある。巻頭内題および第一紙だけを比較しても、書体全体の印象と「法」、「経」、「第」、「来」、「心」など個別の文字の特徴などから四人の筆者に分けられる(18)。その結果、最も力と勢いがあるのが巻三と七、それと互角だが別人の巻一と八および心阿弥陀経、三人目は巻二と五、四人目はほかよりも数段劣る筆者で巻四と六を担当している。いずれも祖本の書体を意識して写しているが、かなり差があらわれている（図11・12）。今回羽豆神社本の調査にCleveland本とSpencer本の拡大写真を持参して比較対照したが、羽豆神社本巻一、八、心阿弥陀経の担当者がCleveland本およびSpencer本の筆者でもあることを確認した。ただし同一筆者であっても、Cleveland本が羽豆神社本巻一よりやや緊張感を欠いているなど出来に差がある。また羽豆神社本においても、Cleveland本らと同様にどの巻も後半では明らかに緊張感が薄れ、書体の疑似異国的な性格が弱まっている。四人の中で一番手の落ちる巻四、六担当者の書体が平安時代十二世紀の写経に近いのも興味深い。また心阿弥陀経には祖本がなかったはずだから当然だが、同じ筆者でありながら羽豆神社本巻一、八とは全体の印象も異なっている。なお全巻の外題を書いているのはこの筆者だから、彼が工房の主宰者だったと思われる(19)。

四　巻一見返絵

通常の料紙一紙半を用いて縦のほぼ三倍という長大な画面の右に露台上の釈迦説法図を表し、左に法華経二十八品の経意を微細に描き込む見返絵（図13・14）は、羽豆神社本そしてCleveland本、Spencer本以外に、東アジアでほかに例を見ない。画面外郭は外題題箋と同じ趣向で内側に細い子持ち線を抱く太い金泥郭線である。平安、鎌倉時代の経絵の外郭は細い二重線が常で、中国や朝鮮のそれは太めの外郭の外側に金剛杵などの装飾帯をめぐらし、さらにもう一つ子持ち郭線をめぐらすという豪華な装飾が定型である。つまり、羽豆神社本ら三本の外郭は大陸と日本の外郭装飾のどちらでもない折衷様と言える。また外郭上下の余白は日本の経絵よりは広く、中国朝鮮のそれよりは狭い。また発装側に一・九センチの余白がある。これはCleveland本、Spencer本どちらも全く同じだが、高麗や元の紺紙経では発装側に余白は設けないし、まして日本ではほかに例のない特殊な形式と言える。

見返絵全体の構図や説相図の配置について、先稿ではCleveland本とSpencer本に大きな差はないと述べたが、羽豆神社本の発見で多少見方が違ってきた。羽豆神社本の説相図はCleveland本とほぼ同じ位置や大きさだが、Spencer本が画面左手下方の説相図をいずれも小さめにしたり端近くに寄せたりで、他の二本とわずかだが異なっている。顕著なのは「普門品」による観音菩薩の墜落者救済場面（図15）で、Cleveland本と羽豆神社本が同じく、山崖

図13　羽豆神社本巻一見返し前半

図14　羽豆神社本巻一見返し後半

の上に左を向く観音菩薩を描き、崖の端に飛び込もうとする衆生とその下で焔のような雲に包まれて浮かぶ衆生を描いている。しかし、Spencer本の観音菩薩は崖と反対側の虚空円相中に右向きに表され、墜落する衆生を右手に見るという別趣向である。左手で水瓶をおさえ、右手に楊枝をふるという祖本にあった観音菩薩の姿をCleveland本と羽豆神社本は忠実に転写しているのに対し、Spencer本はなぜか左右を反転させ、さらに観音菩薩を普陀山と思われる山から離したわけである。

もう一つの図像的に大きな違いは露台上の聴聞者である(図16)。これについてもCleveland本、Spencer本を比較した際に注目し、Spencer本が手前の四体をすべて俗形から菩薩にしていることを指摘したが、羽豆神社本はより複雑である。まず奥に五体を描くが、釈迦に近い側から衣冠ともに立派な老齢の男性、次に一人だけ頭光がなく簡素な衣冠で顎髭も乏しい俗人、続く若い女性と壮年の男性はどちらも頭光やきちんとした衣装をつけている。そのあとにCleveland本らにも登場する平たい兜を頭に載せた武将をやや手前に描く。そして露台手前にはすべて仏に向って合掌跪拝する若い女性四人がいて、彼女らには頭光がある。これがCleveland本では奥四体すべて俗形男性、頭光のない武将一人をはさんで手前に五人が連なって座り、うち三人が女性、二人が男性ですべて頭光がある。人数や男女、頭光の有無など三本まちまちなのである。これは法華経「序品」が列挙する聴聞衆、釈提桓因(帝釈天)、名月天子、普香天子、宝光天子、四大天王、自在天子、大自在天子、梵天王、尸棄大梵、光明大梵、八龍王、緊那羅、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、阿闍世王らとその眷属が「各仏足を礼し、退いて一面に坐せり」という情景を表したものである。つまり天部、王侯らの姿なのだが、栗棘庵本南宋版本法華経巻一の変相は、その形姿で尊格の違いをはっきりとさせた二十体の聴聞者[20]として描いている(図16)。ところが羽豆神社本らは聴聞者個々の描き分けの意義を見失い、祖本の情報を一応踏まえた程度で、頭光が加えられる意図や女性が混じる位置を誤解している。一方で彼らの着衣の描写に装飾的な工夫をこらしているのだが、衣装の文様は三本間で使い回しされている。渦巻きや四ツ目などの文様形状は祖本に由来するのではなく、この三本を制作した工房が日本の仏画等で見慣れたものを転用していると考えられる。それ以外の小さな差異は多数あるが、絵師が楽しんで小さな変化を加えたとしか思えないものもある。たとえば露台の高欄や側板、階段の描写における三本の比較は間違い探しのように楽しめる[21]。

見返絵の図像や表現については先稿で詳しく分析しており、荒巻氏も述べておられるので、重複しない主な部分についてのみ述べたい。

羽豆神社本は図像の細かな部分でCleveland本との近似性がめだっている。たとえば画面左端の「囑累品」による仏摩頂付囑場面(図14)で、仏菩薩ともに足元を羽豆神社本とCleveland本は踏み分け蓮華に表し、「譬喩品」の三車火宅場面では太白牛車の車輪をほか二車より豪華に表す(図16)など、Spencer本と違った気遣いが見られる。ただ、それが祖本に由来するものなのか、羽豆神社本、Cleveland本独自の表現なのかは安易には決めがたい[22]。ほかにも羽豆神社本とCleveland本がよく似ているのは、説法する

図15　羽豆神社本観音菩薩

図16　羽豆神社本巻一見返し露台

釈迦の着衣、光背、台座の表現である。Spencer本では釈迦の頭光と天蓋の間に雲が入り込んでさえいて、天蓋そのものや瓔珞の描写にも相違が見られる。もちろん羽豆神社本がSpencer本とのみと共有している表現もあって、露台で言えば床面の描写で、二重と三重の違いはあるが複線が交差する菱形の区画に四ツ目文様を描いている。一方Cleveland本はより複雑で、交差する単線の交点に各方向から点描を寄せている。

表現様式では何よりも、Cleveland本が卓越した技巧を見せる山崖や土坡の金泥描を羽豆神社本がかなり近いレベルで行っていることが注目される。Spencer本がこれをやや苦手とし、粗いグラデーションやべた塗りに近い表現なのと対照的である。Spencer本は建築や人物はしっかりしているが、景物や草花の描写を簡略にしがちな傾向がある。

以上のように三本が同じ工房で同じ祖本を元に製作されたと言っても、図像の解釈や描写技巧の点でそれぞれ違いがあることと、その上でも羽豆神社本にはCleveland本に近い関係があることが確かめられた。

羽豆神社本など三本の見返絵について、荒巻氏は「見返絵を持つ宋元版法華経が多く刊行され、また高麗でも紺紙に金泥で描かれた精緻な見返絵のある法華経が制作され、日本に将来されている。そういった流れの中で竹本氏本のような見返絵が生まれたとみるのはごく自然であり、それを一図に纏める動きが出てきても不思議ではない。本経やクリーブランド本、スペンサー本の祖本ともいうべきものは、十四世紀中に成立したのではないか。[23]」と述べられている。氏があげる竹本氏蔵色紙法華経に付された紺紙金泥の見返絵を筆者は既に十四世紀以降に宋版法華経を元に制作したものと推定し[24]、荒巻氏はそれを認めた上で、その延長線上に羽豆神社本等を位置づけるている。しかし、Cleveland本とSpencer本の見返絵がそうした、宋版七巻本法華版経扉絵の図様を抽出再構成して描かれたものではないことを筆者は先稿で論証しており、その判断は羽豆神社本を調査した後も全く変わらない。荒巻氏は筆者が精緻に行った絵画分析について触れることなく、版経の図様に忠実な説相図が多数あるから十四世紀中に日本で再編集された見返絵が成立し、それを祖本として十五世紀初めに羽豆神社本ら三本が転写されたとされたと述べるのである。

三本の祖本が宋版法華経を日本で再構成したものと考えられない理由をあらためて述べる必要はないのだが、あえて主なポイントをあげると以下の通りである。

- 計画性のある緊密な画面構成で、単なる図像の寄せ集めではない
- 宋版、遼版などの版本法華経には登場しない説相図が複数あり、かつそれらが日本の経絵的な表現ではない[25]
- 版本の経絵には皆無の金泥の濃淡や筆圧を生かした面的な描写が多数見られ、なおかつその部分は最もすぐれた技巧を見せているから、版画から金泥画への置き換えというレベルではなく、水墨画の皴法などを反映していよう[26]。
- 各説相図の空間を区切るのは立体感に富んだ土坡や山で、日本の金銀泥経絵が頻用する霞をまったく用いていない。
- 釈迦と菩薩の面貌で、唇の朱だけでなく上瞼と瞳を墨で描き白目も塗っている。日本の金銀泥経絵には見られない表現である。

きわめてすぐれた絵画である北宋時代の金泥画法華経変相が祖本だったと筆者は推定し、その祖本こそが逆に版本法華経変相の原点だと主張してきたのである。大本のイメージソースを共有する宋版本とこの羽豆神社本ら三本に似通った表現が展開しているのは当然なわけである。

五　住吉大社、熱田神宮奉納経のゆくえ

一九五〇年に、奥書の記録を手がかりに田中塊堂氏がそのゆくえを案じた、応永十一年住吉大社奉納本、応永十五年熱田神宮奉納本の二部の紺紙金字法華経について、ここまでの検討が有力な可能性を提起できるように思う。現在まったく所在不明なA京都市某家本と羽豆神社本どちらも巻一にしか見返絵がないのだから、一色道範が同じ工房に制作させたもう二部の金字法華経もそうだったに違いない。それはおそらく転写時点での祖本が巻一にだけ見返絵があったためであろう。さて、先稿の最後で筆者は合衆国所在の二種の紺紙金字法華経がなぜ巻一単独で残っているのかを解き得ない疑問とした。だが、本稿の考察を経た今、この二巻こそ一色道範によって住吉大社と熱田神宮に奉納された金字法華経巻一であろうと考える。書体、画風、書誌的特徴いずれもその想定を覆す要素は何一つない。ちなみにCleveland本は一九七〇年に当時のCleveland美術館館長だったシャーマン・リー氏によって日本から購入されたと同館からうかがっている。またSpencer本は反町茂雄氏がNew York Public Libraryに納めたことはよく知られているが、納入時期は一九六〇年代だったと同館のキュレーターから一九八〇年に調査した際にうかがった。住吉、熱田の両神社から人手に渡ったのは戦後ではなくさらに前だと思われるが、その華麗な見返絵の魅力が巻一のみを、それも奥書を切り離して市場に流出させたものと思われる。実際、Cleveland本Spencer本どちらも巻末は裁ち落とされている。もちろんどこかに住吉大社、熱田神宮本の巻二から八までの僚巻が眠っている可能性は大で、何よりA京都市某家本とその豪華な経箱の出現が待望される。

こうした推定を補強するのが、羽豆神社本とCleveland本に共通点が多く、Spencer本がそれらと少し異なる傾向を見せていることである。Cleveland本が羽豆神社本と同じ応永十五年四月に熱田神宮に奉納されたもので、Spencer本がそれらをさかのぼる応永十一年に住吉大社に奉納されたものならば、三本の違いは腑に落ちる。だが、あわせて四部も制作された法華経ならばさらに数部制作されていておかしくない、田中氏がたまたま紹介した記録と現存作例を無理に結びつける推測だという批判が当然あろう。しかし、羽豆神社本と多くの共通点を持つCleveland本が熱田神宮奉納本だった可能性については揺るがないと確信する。熱田神宮の大宮司千秋氏が南北朝時代の元亨年間に羽豆岬に羽豆城を築き、その際に羽豆神社の社殿も修復するなど深いつながりがある。一色満範（道範）が尾張国から分国した知多守護となったのが応永十四年だから、翌十五年の両社へほぼ同時に金字法華経奉納を奉納した趣旨も明快である。

さてSpencer本の制作時期と事情は一応仮定としておくが[27]、問題は祖本が何であれ、特異な形状で室町時代応永年間とは到底思えない画風や書体の法華経がどうして四回も転写されたのであ

ろうか。日本の古写経の中でもこれほどくり返し転写されたのは筆者が詳細に考察した延暦寺銀字本系諸本が九世紀以来、大陸の祖本が持っていた個性的な表現をつとめて転写していた状況に羽豆神社本らの転写は重なって見えてくる。延暦寺銀字本の祖本は唐から円仁が請来した法華経であり、羽豆神社本らの祖本も宋から請来された法華経なのである。どちらも貴重な請来本法華経だったからこそ転写される価値があったし、延暦寺銀字本が特権的な営為として転写されていたのと同様に、羽豆神社本系が一色道範にのみ転写を許した何らかの理由があったと推測する。ほかに転写本がなく、四部の転写本がすべて一色道範奉納経だったことこそ祖本の希少性を際立たせていよう。道範は祖本の由緒や価値をよく知る立場にあり、延暦寺経蔵やその南谷工房と何らかの関係を持っていたと推測されるのである。秘められた伝承をともなうこの二グループは、つとめて異国的な性格を守り続けることに意義を有した特殊な写経群なのである。

六　経箱ともう一部の金字法華経

荒巻氏は紹介されなかったが、羽豆神社本九巻を収める経箱はみごとなもので、また本経の成立を解く重要な存在である。濃紫色を呈する漆塗被せ蓋造りの箱で、四足が付いた底板に身が載り、深い被せ蓋は蓋鬘(側面)の手がけ部分を刳った形状である(図17)。蓋および身の口縁を金の梨地仕上げとし、足の周囲にまで蒔絵を施す。蓋の甲には七個、長側面に三個、短側面に一個、身の長側面に二個、短側面に一個の輪宝をそれぞれ金の平蒔絵で表している。輪宝の文様は身の左右に付けた銀の紐金具にも用いられている。紐こそ失われているが輪宝形紐金具は良質の銀を指す「なんりゃう(南鐐)」と施入注文が記していたように銀製の精緻な彫刻である。経箱の大きさは長さが三三.六センチ、幅が一七.三センチ、高さが一六.三センチである。箱(身)の内法は縦三〇.六センチ、横一四.三センチである。蓋の表裏には銘などは書かれていない[29]。

「施入注文」に「御箱蒔絵、御紋輪寶、御くりかた、なんりやう、輪寶」と書かれているとおりの造作で、応永年間施入時のものとして間違いない。調査の際にこの箱をどこかで見たような印象をおぼえたので、調査後に過去の調査記録を点検した結果、滋賀県東近江市百済寺が所蔵する重要文化財の輪宝蒔絵経箱[30](図18)と大きさと造作がほぼ同一であることを確かめ得た。百済寺には十二世紀法華経写経の傑作である金字法華経および開結経十巻があるが、それとは別にもう一部八巻の紺紙金字法華経がそれを収める経箱とともに所蔵されている[31](図19)。黒漆塗被せ蓋造りで、蓋鬘に刳り形を設け、底板に金蒔絵の四足をつけるなど羽豆神社経箱とまったく同じ体裁である。違っているのは蓋甲の蒔絵輪宝が六個で、中央に「紺紙金泥法華経」と金字で書かれていること、紐金具が同じ輪宝形状ながら金銅製であることの二点のみである。大きさは長さ三三.八センチ、幅が一六.九センチ、高さが一五.八センチでほぼ同寸と言ってよい。そしてこの経箱は蓋裏に「應永十六年己丑二月十七日」と金字の施入銘がある。本稿の記述のため百済寺御住職濱中亮明氏、琵琶湖文化館学芸員上野良信

氏にあらためて確認したところ、見返絵はないとのご教示をいただいた。筆者が一九八〇年にこの百済寺別本金字法華経を調査した際は二巻分しか記録しなかったが、金地の見返しと表紙、題簽、太めの横界線などは羽豆神社本らの形状と酷似している(32)。色糸平組紐(33)と六角水晶の軸端も当初のものだが、これらは羽豆神社本やSpencer本とは一致しない。書体は二巻別筆だが、どちらも羽豆神社他三本とは違っていて、平安時代十二世紀の百済寺本金字法華経に近いと感じた印象を今も記憶している。巻一に見返し絵のないこの別本金字法華経は、写本としては羽豆神社本らの系統ではない可能性が高い。また別本法華経巻一は巻頭一行分の余白しかなく、そこに経文とは異なる金泥で「百濟寺本堂不出郷經之所」と追記されている。巻二は羽豆神社本らと同じ形式で巻頭に縦界線のない二行分の余白を設け、そこにやはり本文とは別字で「百濟寺本堂不出郷経也」と二行分の空間にふさわしい堂々とした大きな字で書かれている(図19)。この追記の書体は羽豆神社本らの書体とも羽豆神社本の奥書とも一致しない。また上野良信氏のご教示によると別本各巻の巻末は奥題の後に四ないし五行の余白が残るとのことで、一色氏奉納経らとは明らかに異なっている。

しかし、問題は言うまでもなく羽豆神社経箱と酷似する経箱に応永十六(一四〇九)年の銘があり、写経も筆者などは違うが書誌的には羽豆神社本らと同一工房の制作と考えられることである。室町時代応永九年から十五年にかけて羽豆神社本ら三本を写経し、経箱をあつらえた工房は当然すぐれた書写装潢の実力を有

図17　羽豆神社経箱

図18　百済寺経箱

図19　百済寺別本法華経巻二

していたから、一色道範以外の注文を受け、別の系統の金字写経と経箱を制作していておかしくない。ここで注目されるのは田中塊堂氏が紹介していた一色道範が応永九年に制作させたA京都市某家本の奥書に「叡山本院南谷住侶幸朝書之」とあったことである。叡山に「南谷」は数カ所あるが、「本院」という以上東塔南谷であろう。残念ながら叡山東塔は明応八（一四九九）年の細川政元、元亀二（一五七一）年の織田信長が行った焼き討ちで壊滅的な被害を被り、文書や史料も失われたため堂塔の記録はあっても近世以前の寺内工房や下級僧侶の人名についてはほとんど情報が得られない。そのため応永九年に一色道範施入金字法華経を担当した幸朝という僧侶について詳細は不明である。しかし多くの事例を見ても、書写者として自らの名を記す行為は写経工房の主宰者であることを意味する。田中氏の論考[34]に基づく限り、これらが「恐らく同一筆者であり、同様の装幀」な以上、羽豆神社本ら三本は叡山内の写経工房で製作されたと推定でき、田中氏も叡山の写経僧の意義を強調しておられる。そして天台宗の古刹百済寺に伝わる「不出郷」の金字法華経も、別途の注文だが同じく延暦寺の工房が製作したことはほぼ確かであろう。

結び

日本の古写経中に文字通り燦然と輝く、この羽豆神社本ら三本は東アジアにおける紺紙金字写経のある特異な系譜に連なっている。これらが祖本から三世紀以上も後の十五世紀初めの一時期になぜ突然集中して転写されたか、史料はあまりに乏しいが以下のような推測は不可能だろうか。即ち、明が成立した翌一三六九年に三代将軍となった足利義満は応永八（一四〇一）年に明へ使節を派遣したり、自ら明船を見に赴いたり、明や朝鮮の使節を何度も自邸北山第に招くなど大陸文化に強い関心を持っていて、唐物愛好癖でもよく知られている。また相国寺の伽藍整備をはじめ禅宗興隆に寄与したが、頻繁に法華八講を行うなど法華経も篤く信仰していた。元を滅ぼし漢族王朝を復興させた明朝は仏教を庇護し、寺院や仏教文化の興隆を支持していた。明朝にとって文化的にも一つのモデルだった宋王朝の神宗皇帝が白河天皇に贈って以来、長く延暦寺経蔵に秘蔵されたままだった紺紙金字法華経を見いだした義満がそれを転写させて明の皇帝に贈ったとすれば、翌応永九年に義満の恩寵を被っていた若狭、丹後守護一色道範が特に許されて再び転写を行った可能性はあり得る[35]。またそうした背景を踏まえれば、一色道範が住吉、熱田、羽豆といずれも海に面した主要な神社にこの転写本奉納を重ねた意図も見えてこよう。状況証拠ばかりだが、あまたある日本の経絵の中で屈指の完成度を見せ、大陸の祖本に直結する羽豆神社本らの成立にはそれだけの条件が必要であろう。

註

1　須藤弘敏「経絵に映る宋と日本」「國華」一三七六号　二〇一〇年、須藤弘敏『法華経写経とその荘厳』中央公論美術出版二〇一五年に再録。以下本文中ではこれを「先稿」と呼ぶ。

2　荒巻史枝「羽豆神社所蔵紺紙金字法華経および心経・阿弥陀経について」『歴史文化社会論講座紀要』12号、二〇一五年。

3　二〇一七年一〇月二十日、二十一日

4　般若心経と阿弥陀経を一巻に写経している。

5　一紙当たりの行数もCleveland本が二六行なのに対し、羽豆神社本は二四行である。

6　施入注文には「卯月廿五日」と記すが、款記の方はすべての巻で二文字分以上空けたままである。その結果誤解が生じ、奥書部分の切り取りの際に「卯月」と「日」の間で行ったため、別途保存されている奥書はすべて「日沙弥道範」という状態になっている。

7　註1に同じ

8　紐はCleveland本、Spencer本ともに当初のものは全く失われている。百済寺別本は多色の平織組紐で羽豆神社本よりさらに華やかである。

9　田中塊堂「一色道範とその納経」「史迹と美術」二〇二号、一九五〇年。同『日本古寫経現存目録』思文閣、一九七三年。筆者は田中氏が『日本古寫経現存目録』中に一色道満発願金字写経をあげていたのは知っていたが、応永年間の写経であるため、様式から鎌倉時代と推定していたCleveland本、Spencer本と関わるものとは気づかずにいた。また「史迹と美術」の論考は知らなかった。重要な報告を見落としていた不明を恥じるばかりである。

10　田中氏は「但しこの説相圖は序品のみにあって他の巻には畫かれてゐない」と記すが、八巻本法華経とされているから巻一の意であろう。

11　田中塊堂『古写經総鑑』502頁、549頁。なお田中氏はこの断簡について「該經は當時管見に觸れた某手鑑中に貼られてあったもので、しかも願文の一紙によって記載したもの」と註9の報告に述べられているが、氏自身の記述や次に掲げる『池田大仙堂古美術集芳』などを見る限り、手鑑に貼られていたようには思えず、氏の記憶違いかもしれない。

12　池田庄太郎編『池田大仙堂古美術集芳』上下巻及び解説編、私家版、一九四一年。当該金字款記経断簡は圖版第二九。なお本書解説編はほとんどの図版の解説を石田茂作、田中塊堂、田中一松らが書いているのだが、この図版第二十九は解説が省略されている。

13　熱田大宮司千秋家の神寶目録には「但し三部共各人の巻闕」と記していたと「史迹と美術」論文に田中氏は記すが、『日本古寫経現存目録』では「但し三部共各八之巻闕」と書かれているため、実際は何巻が欠けていたのかよくわからない。「人」が「八」の誤記と決めつけることはできない。これについて荒巻氏は「不動院文書中の紺紙金泥妙法蓮華経がこれにあたり、巻第八の巻末に熱田社に施入した旨の願文がある。それによると、本経の願文とほぼ同文で、施入日は「卯月二日」とある。巻第一の所在は不明のため、見返しを確認する術は無いが、本経と奉納日が近いことから、おおよそ同じような装訂（ママ）が施されていたと推察される」と紹介されている。氏の文章を読む限りでは、どこの不動院か、巻二から八までが残っているのか巻八だけ伝来しているのか（それならば寛政年間の熱田神宮に巻八がなかったことがわかりやすい）判然としないが、見返絵のない熱田神宮奉納の紺紙金字法華経の一部は現存していると理解される。荒巻氏の報告にある当該奥書は以下のようである。

　奉施入　尾張國熱田大明神御宝前／紺紙金泥妙法蓮華経一部八巻并心阿弥陀経各一巻／右意趣者奉為　天長地久國土豊饒殊武運長久／子孫繁栄息災安穏寿命長遠随順　上意／飽足捧禄心中所願一々圓満仍／所奉施入如件／一色従五位上修理大夫源朝臣／應永十五年戊子卯月二日　沙弥道範（花押）」（表記は荒巻氏報告に拠る）

14　註1

15　註9「史迹と美術」二〇二号、一九五〇年

16　東北大学附属図書館蔵の零巻紺紙金字法華経巻八は、九世紀に書写された延暦寺銀字法華経を十二世紀に転写したものなのだが、見返絵の図様を写していても画風は院政期のものに変わっており、本紙の書風は延暦寺銀字本とはまったく異なり、むしろ羽豆神社本グループにも似た宋風の様式を見せている。須藤弘敏「転写と伝承」『法華経写経とその荘厳』第四章、二〇一五年参照

17　註11

18　古写経や経絵の研究でしばしば見られる方法に、特定の文字のみを抽出してその様式を検討するものがある。しかし、同一の経巻の中でさえ字形は変わったり、巧拙が生じたりする。ましてや本経のように祖本の書体を写している場合は、より慎重な比較対照が求められる。さらに

作品を実際に調査した上でなく、図版や写真のみを参照して比較したと称するものさえある。金字写経の場合、金泥の性質や光り方、表面の磨き処理の程度など、写真では知り得ない重要なポイントが多々ある。筆者自身の自戒をこめて本作業は特に丁寧に行った。また、巻一の現状第十四紙、巻八の第五紙以降など、同じ巻の途中でも変化が極端な箇所があり、一部の巻は複数筆者で担当したかとも思える。なお、巻六の第十六紙の五行目は削って書き改められている。

19　金地表紙に貼られた外題題箋のうち心阿弥陀経のみ「経」を「經」としているが、書体そのものは法華経八巻と変わりなく同一筆者である。また外題題箋はCleveland本は元の表紙がないので比較不可能だが、Spencer本はやはりこの羽豆神社本巻一と同一筆者である。題箋は細い線を抱えた金泥の二重郭線という日本の写経では珍しい形状だが、高麗経では一般的な形式である。

20　頭光があるものが菩薩形、四天王ら十二体、王侯像らは頭光がない八体でうち二体は女性である。

21　側板や基壇部格狭間、階段の上面と蹴込みなど三本すべてが同じ表現はない。ただし、Cleveland本と羽豆神社本が高欄の手すりや支柱を金泥ベタで描いているのに対し、Spencer本が淡い金泥ぼかしで描くのは、前二者がほかの部分でも比較的似た表現を見せるのに対し、Spencer本のみが異なる傾向を見せる一つの特徴である。

22　摩頂付囑の情景は各種宋版法華経には描かれないので比較できない。また宋版で秦孟彫銘のある法華経巻二変相では三車のうち一番奥に描く太白牛車の輻がほかの二車と違い、羽豆神社本、Cleveland本のように幅広の輻に表されているから、これは祖本に基づくものであろう。（『妙法蓮華經圖録』国立故宮博物院、一九九五年）

23　註2

24　註1

25　静嘉堂文庫蔵の宋本手写法華経冊子は「高原穿水」など日本の経絵にしか登場しないと言われる説相図もしばしば描いているが、これにも登場しない仏摩頂を三本は描いている。すべてが宋版経由来だとすると説明がつかないし、きわめて大陸色の強い画面の一部に日本経絵の説相図を取り込むことはあり得ない。

26　この技巧を羽豆神社本とCleveland本は巧みに表しながらSpencer本はやや苦手としていることから、祖本がみごとな技巧で描かれていたことを証明する。Cleveland本とSpencer本しか知らなかった時点ではCleveland本の絵師個人の技量にもいくらかは負っているかと考えていたが、羽豆神社本が同様のレベルで描いていることから祖本の画質の高さを再認識するに至った。ちなみに元の至元二八（一二九一）年の紺紙金銀字華厳経（京都国立博物館蔵）扉絵は高麗経絵の影響下、金銀泥を駆使した東アジア屈指の経絵だが、ここでも泥のグラデーションはうまくない。三本の祖本北宋神宗皇帝賜与本が水墨画の技巧を元にした卓抜した絵画だったことを逆に明らかにする。

27　Spencer本の巻末は二行のみ残して裁ち落とされているが、奥題の次の行に、経文とは異なる金泥で「小倉加賀守入道是運」と記されている。当初の奥書は故意に裁ち落とされているのだから、これはその後に所持あるいは奉納を世話した人物の追記だと推定できる。先稿でもこの小倉入道是運なる人物は特定できなかったが、一色道範（満範）が丹後守護職を務めて以来、丹後宮津の小倉氏はその被官であった。ただし、小倉氏は播磨守であって加賀守ではないのでSpencer本の伝来等に結びつけ得るかどうか不明である。

28　「転写と伝承　延暦寺銀字本・仁和寺本系法華経について」『国華』一三一九号、二〇〇五年、須藤弘敏『法華経写経とその荘厳』中央公論美術出版二〇一五年に再録。須藤弘敏・浦木賢治・西川真理子「加須市徳性寺蔵紺紙金字法華経について」『埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要』一二号、二〇一八年。

29　この経箱には素木造りの外箱があり、その蓋裏には「明治二十一年十二月三十一日作之」と墨書されている。

30　指定名称は「紺紙金泥妙法蓮華経入黒漆蒔絵函」（明治三十三年指定）

31　この金字法華経を十二世紀のものと区別するため便宜上「別本金字法華経」と本稿では呼ぶ。またこの金字法華経と経箱については百済寺のご許可をいただき、一九八〇年五月に寄託先（現在も）の琵琶湖文化館で調査させていただいた。ただし、その際は時間がなかったため巻一と巻二を開いたのみだった。そのため、本稿執筆にあたり再調査をお願いしたが、ご許可が得られなかったため、記述は過去の記録と写真に依拠し、一部上野良信氏のご示教をいただいている。

32　書誌データは以下の通りである。

巻一　紙高二七・三センチ、界高二一・三センチ、天界二・六センチ、地

界三·四センチ、界幅一·八五センチ（五行で九·三五センチ）。
巻二　紙高二七·一センチ、界高二一·一センチ、天界二·六センチ、地界三·四センチ、界幅一·九センチ、紙数二五紙、一紙に二五行書写。
なお上野良信氏によると八巻の紙高は二七·二ないし二七·四センチ、界高は二一·二センチないし二一·四センチで界幅は五行で九·二ないし九·四センチであり、題箋は縦が一一·五ないし一一·七センチ、横が二·六ないし二·七センチとのことである。

33　当初の紐は巻二に残る。他巻については記録していない。

34　註9

35　道範こそ将軍義満に宋帝由来の金字法華経が存在することを告げ、その転写を勧めた人物なのかもしれない。道範のみが特権的に転写をくり返し得たのもそうした事情ならば納得できる。道範が熱田、羽豆両社に金字法華経を奉納した応永十五年四月は二十一日に将軍義満が彼の邸を訪れている（『教言卿記』）。またその月十日に義満は伊勢神宮に最後の参詣を行っている（『教言卿記』）。義満は翌五月六日に亡くなり、道範も翌年の一月六日に亡くなっている。彼による金字法華経奉納は羽豆神社がおそらく最後だったろう。

調査及び図版掲載については、羽豆神社宮司間瀬研司様の格別のご配慮をいただき、百済寺御住職濱中亮明様、琵琶湖文化館上野良信様にもご助力をいただいた。ここにお礼申しあげたい。また、掲載図版は羽豆神社本および百済寺別本については須藤撮影のもの、ほかは須藤弘敏著『法華経写経とその荘厳』および九州国立博物館編『湖の国の文化財展図録』から転載した。